

研究ノート

「長恨歌」における道教と佛教

——『佛所行讚』『佛本行集經』の影響を中心として——

石 井 公 成

はじめに

白居易の「長恨歌」は、道教の色彩が濃い作品と言われてきた。確かに、晩年になって道教への傾倒を強めた玄宗と、道観に入つて女冠となつた後に入内した楊貴妃が主人公であるうえ、道教関連の言葉が頻出しており、道士も登場している。

しかし、白居易については佛教信者であり、また老莊思想に心のよりどころを求めたこともあったことが知ら

れている。⁽¹⁾ そもそも「長恨歌」は、佛教を思わせる言葉で始まっていた。冒頭の「漢皇重色思傾國」の句がそれだ。この句は、玄宗がいかに絶世の美女を求めていたかを示したものと受け取られているが、「傾國」の美女を求めた結果、實際に國が傾いたのだから、これは自業自得以外の何物でもないだろう。そればかりではない。楊貴妃の入浴場面を初めとして、「長恨歌」は實は佛教經典に基づく部分が少なくない。

一方、道教については、「長恨歌」は仙女や仙宮など

に關する一般的なイメージを利用してゐるものの、特定の道教經典の引用は見られず、踏み込んだ内容は記されていないように思われる。そこで本稿では、佛傳である『佛所行讚』と『佛本行集經』の利用に着目しつつ、「長恨歌」における道教と佛教の要素について検討していきたい。

一 道教との關係

「長恨歌」には、道教風な言葉が多く見られる。「仙樂霓裳羽衣、方士、致魂魄、海上有仙山、虛無縹渺、五雲綽約、仙子、玉妃、雪膚、仙袂、蓬萊宮」などがそれだ。「五雲」は、『雲笈七籤』では、「絶空の宮」は飛仙だけが辿りつくことができる「五雲の中に在り」とされ、「玉靈仙母、金華山の仙女の常に遊ぶ所なり」と記されている。白居易以前の例ではないが、こうした用例から見て、「五雲」は單なる吉兆ではなく、道教風な雰圍氣を表わす語として用いられたものと見て良いだろう。そのうえ、白居易が玄宗と楊貴妃の悲話について友人であ

る陳鴻・王質夫と語り合つて感嘆し、「長恨歌」が生まれるきっかけとなつた仙遊寺は、名が示すように、かつては道觀だつた。⁽³⁾

白居易は、若い頃、元稹とともに靜かな道觀、華陽觀にこもつて勉學に勵み、科擧を受験して元稹とともに合格したことはよく知られている。張振謙は、こうした點とその詩文の用語から見て、白居易は青壯年時には常に「道を尊び仙を好」んでいたと述べ、「長恨歌」は當時の文人が道教の神仙を借りて男女の戀愛を描いた一例と説いている。⁽⁴⁾しかし、「長恨歌」が仙女のイメージを利用してゐることは事實だが、青壯年時の白居易が常に道教を好んでいたとまで言うのは行きすぎだろう。徐翠先・石東升は、白居易が神仙を喜んだのは元和十年(八一五)に江州に左遷させられた時期以後のこととしており、神仙世界を題材とした「長恨歌」が書かれた元和元年(八〇六)當時は道教に熱心ではなく、「長恨歌」は神仙美學に託して想像を馳せたのであって、同年の作である「夢仙」などはむしろ神仙信仰に對する一種の「理性批

「長恨歌」における道教と佛教

二〇

判」となっていると論じている。⁽⁵⁾ 實際、「夢仙」は、「悲しいかな、仙人を夢みるは。一夢、一生を誤らす」としめくくっており、仙人になろうとすることの空しさを強調して終わっている。

澤崎久和によれば、仙遊寺における楊貴妃の物語の主要な語り手は、その仙遊寺近邊に住んでいてこの寺と縁が深く、神仙説を好んでいた王質夫だったようだ。⁽⁶⁾ 白居易は世俗に染まらぬ王質夫と氣が合ったようであり、しばしば詩を贈ったり詩中で觸れたりしているほか、亡くなった時には「哭王質夫」を作って悼んでいるものの、その道教信仰をすべて認めていたわけではない。「長恨歌」を作った數年後に王質夫に贈った詩、「贈王山人」では、王質夫について「日々神仙の説を聴き、……潜かに長生の訣を求」めていると述べたうえで、長生しても結局は死んでしまうだけだと述べ、「(佛教の)無生を學ぶに如かず」と勧めている。つまり、當時の白居易は、老莊思想を評價しており、仙女との戀愛譚を好む類の神仙趣味を有していたものの、いわゆる道教信仰に深入り

することについては懐疑的だったと思われる。

二 「長恨歌」と佛教の關係

「長恨歌」については、「目連變」との類似が有名だ。

晩唐の孟棻『本事詩』によれば、詩人の張祜が白居易と初めて會った際、張祜は白居易の「目連變」を讀んだことがあると告げ、白居易が何のことかと尋ねると、「長恨歌」の「上窮碧落下黃泉 兩處茫茫皆不見」は「目連變」ではなくて何でしようと言ったところ、意氣投合し、終日宴をともしたという。「目連變」にこうした表現があるのでないが、目連が亡くなった母親を探して地獄から地獄へと經めぐるものなかなか探し當てられないという點が「長恨歌」に似ているではないか、ということだろう。

現代の研究者で敦煌變文との關連について着目した研究者に、陳允吉がいる。⁽⁷⁾ 陳は、「長恨歌」は「變文講唱の深刻なる影響の下で生まれた一首の代表作」と稱しており、その一例として『歡喜國王緣』との關連を示唆し

ている。『歡喜國王緣』では、歡喜國王の寵愛する夫人は亡くなった後、兜率天に生まれて樂を享受していたものの、王の戀慕の念に應えるために天女たちと地上に降りて王に會い、世間に戀着せず修行して生天を求めよう告げたところ、國王も禮佛・受戒をおこなって功德を積み、天上に生まれたとする。末尾は「淨土天中、還た相い逢ふ」としめくられ、淨土で再會することができたと述べている。

天人となった夫人が、今も夫人を戀慕する地上の王のことを思いやるなど、「長恨歌」と共通する面が見られることは確かだが、「長恨歌」では楊貴妃は死後、玄宗のもとを訪れていないなど、違いも大きい。また、「長恨歌」の特徴は、玄宗と楊貴妃は、かつてのような濃厚な愛情生活に戻ることは永遠にできないとされていることではなからうか。だからこそ「長恨」と言われているのだ。松浦友久は、中國の古典文學において、状況が變われば實現可能でありながら現實にはそうなっていないことに對するつらさである「怨」と違い、「恨」はとり

かえしのつかない事態に對する思いであると指摘している⁽⁸⁾。そもそも、玄宗はやむをえない状況であったとはいえ、愛する妃を殺すことを認めているのだ。これも「長恨」の一因だろう。こうして見ると、「長恨歌」は独自の作品であり、よく有る天女・仙女との戀愛譚の類とはかなり異なっていることが分かる。

三 佛傳の具體的な影響

「長恨歌」が佛教經典、それも佛傳の影響を受けている證據は、楊貴妃の入浴場面だ。「長恨歌」が東アジアであれほど人氣となった原因の一つは、冒頭の入浴場面が新鮮な表現續きで衝撃的であったためではなからうか。「長恨歌」以前の中國古典文學において、美女が沐浴する様子を描いたものはない。一方、沐浴が毎日の習慣であるインドでは、宗教文獻にも文學作品にも女性の沐浴場面はしばしば登場する。現代でも、インド人が最も好む繪畫の構圖は、クリシュナ神が沐浴する牧女たちと戯れる光景だ。

しかも、インドのそうした傳統を反映している佛教では、佛傳にすら美女の沐浴場面が出てくるだけでなく、美女の沐浴が男性に與える影響についても語っている。たとえば、東アジアで廣く讀まれた佛傳である隋・闍那崛多譯『佛本行集經』では、甘蔗王の第一妃が我が子を王位につけるため、「婦人の莊飾の法」を極めて王の愛情を増させようとするが、その「法」とは、體を綺麗に拭き清めた後、「香湯もて沐浴し、氣をして芬芳たらしめ、髪には澤蘭(香)を塗り、面には脂粉を著け、花鬘・瓔珞もて種種莊嚴」する(大正三・六七四下)ことだった。

また、美しい表現で知られ、インドでは老若男女が朗唱したと傳えられるアシュヴァゴーシヤ(Aśvaghoṣa、馬鳴)の傑作、『ブッダチャリタ(Buddhacarita、佛の行い)』を美文で漢譯した『佛所行讚』⁹⁾では、死んだように眠って見苦しい姿をさらけ出している姦女たちを見た太子は、「女人は性、是の如し。……沐浴して縁飾を假り、男子の心を誑惑す(女人性如是。……沐浴假縁飾、誑

惑男子心)」(大正四・一〇上)と述べ、宮殿を出る決意を固めたとされている。すなわち、女というものは、沐浴して着飾り、男の心を惑わすものだ、というのだ。

こうした佛傳、特に『佛所行讚』が中國文學に與えた影響については、龔賢は、梁啓超『翻譯文學與佛典』が中國の小説や歌曲と佛典の關係を強調している個所を引用し、出家しようとする太子を引き留めるため、父王が美しい妃や伎女たちをあてがって世俗の慾望にふけらそうとする『佛所行讚』の場面などを引いて、妖艶で性的な女性描寫が梁代の宮體詩に見える男女關係の描寫に影響を與えたと論じている。¹⁰⁾これは正しい指摘だが、特定の作品に對する具體的な影響は指摘されていない。しかも、實際には具體的な影響は、梁代の宮體詩以上に、「長恨歌」に見られるのだ。「長恨歌」の有名な冒頭部分¹¹⁾は、次の通り。

楊家有女初長成 養在深窗(閨)人未識……春寒賜浴華清池 溫泉水滑洗凝脂 侍兒扶起嬌無力

これに對し、『佛所行讚』では、太子を育てた義母の

大愛瞿曇彌が太子の出家を聞いて悲しむところは、こう描かれている。

妙網柔軟足 清淨蓮花色 土石刺棘林 云何而可蹈
生長於深宮 溫衣細軟服 沐浴以香湯 末香以塗身
今則置風露 寒暑安可堪 …… 念子心悲痛 悶絕
而覽地 侍人扶令起 爲拭其目淚。(大正四・二五上)

すなわち、大愛瞿曇彌は、「あの子は」足が柔らかいので、石やトゲの多い林などどうして歩けよう。宮廷の奥で育ち、いつも暖かい香湯で沐浴して體に香を塗るような生活だったのに、風露にさらされ、暑さ寒さにどうして耐えられよう」と嘆き、悲しみのあまり昏倒してしまい、侍女に扶け起こされるのだ。このうち、「長恨歌」の「初長成 養在深窓(閨)」と『佛所行讚』の「生長於深宮」、「長恨歌」の「春寒」「賜浴」と『佛所行讚』の「寒暑」「沐浴以香湯」、「長恨歌」の「侍兒扶起」と『佛所行讚』の「侍人扶令起」などは、似すぎていないだろうか。太子と楊貴妃が歩けないとされている點も共通している。楊貴妃が華清宮の溫泉で沐浴することが許

されたのは、実際には十月であるのに、「長恨歌」ではまだ「寒」い時期であったことを強調している。

「初長成 養在深窓」は、「雲鬢」の語も見えている傳玄「艷歌行」が「長大逃深室」と詠っている部分に基づく可能性もあるが、「長大逃深室」では、成長すると邸の奥深くの室にこもってしまふのであるから、『佛所行讚』の「生長於深宮」の方が似ていると言えよう。

また、「長恨歌」中の「溫泉水滑洗凝脂」の句は、『佛所行讚』の「末香、以て身に塗る」という動作と對應する面があるように思われる。「溫泉水滑洗凝脂」は、「長恨歌」の四年後に當たる元和四年(八〇九)に白居易が王質夫に與えた七言律詩「送王十八歸山寄題仙遊寺」の名文句、「林間暖酒燒紅葉 石上題詩掃綠苔」で用いられたのと同様の倒置表現だろう。つまり、「凝脂を洗う」と「溫泉の水が滑らかに」流れてゆくということであって、溫泉につかった楊貴妃が手で湯を腕や肩や胸にそっとかけると、固まったラードが水をはじくように、白くて脂に富んだ肌の上を湯がさらさらと流れ散っていく

「長恨歌」における道教と佛教

二四

とどまらない、という様子を描いたものと思われる。手で湯を腕や肩や胸にかけてという動作は、末香を身に塗るといふ動作と對應していると考えられないだろうか。白居易は、女性の魅力を表す新鮮な表現を佛典に求めたと考えられる。

男をとりこにする女性の危険な魅力については、釋尊の本生譚にも見られる。こちらは釋尊の前世の身である馬王が、人肉を好む鬼女にほかならない羅刹女たちにとらえられた商人たちを救う説話であって、東南アジア諸國で非常に人氣があり、日本でも『宇治拾遺物語』の纈城説話などで知られる話だ。『佛本行集經』では、五百人の商人が難破してある島に泳ぎついたとし、男を魅力でとりこにしてから食う羅刹女たちについて次のように述べている。

令使端正可憐過人、纔不及天、或作童女、或復化作不久嫁形。化是身已、香湯澡浴以香塗身、著種種衣、種種瓔珞、莊嚴其身、首戴種種妙花天冠、一切身處、垂諸花瓔、以爲旒蘇。復以妙花、莊按其身、花爲瓔

珞、於花鬘處、懸以寶鈴、捷疾走行。(大正三・八七九中)

すなわち、羅刹女たちは、天女にはやや及ばないものの、人間より美しく愛らしい様子に化けたのであって、あるいは少女となり、あるいは結婚したての新妻の姿となった後、「香湯もて澡浴し、香を以て身に塗り」、種々の衣装と装身具で身を飾って、頭には種種の「妙花の天冠」を載せ、體中に花をつけて飾り、「花鬘」に「寶鈴」をつけ、敏捷に海岸まで駆けて行ったという。ここでも香湯で沐浴して香を體に塗り、花の冠や花の髪飾りをつけていることが注目される。「寶鈴」は美しい音がする金の鈴だろうから、歩くと金のかんざしにつけた玉が揺れて鳴る金歩揺に似ている。

四 道教的的世界觀との齟齬

「長恨歌」では、仙女となった楊貴妃を描くに當たり、佛教經典の表現を用いたことによって、道教的的世界觀とは合わなくなった箇所が見られる。たとえば、玄宗が夜

も眠れないまま楊貴妃を思う様子に動かされた周囲の者たちが、「魂魄を致す」ことが得意だという道士に貴妃の魂を探させる場面がそうだ。

爲感君王輾轉思 遂教方士殷勤覓 排空馭氣奔如電
升天入地求之徧 上窮碧落下黃泉 兩處茫茫皆不見
忽聞海上有仙山 山在虛無縹緲間 …… 雲鬢半偏
新睡覺 花冠不整下堂來

すなわち、道士に楊貴妃の魂を「覓」めさせると、道士は空を押し開き大氣を馭して電光のように奔り、天に登り地に入って探し、天上も黄泉もくまなくうかがったものの、兩方の箇所とも廣々としていて見當たらず、海上に仙山があると聞いたというのだ。だが、招魂の際、このように猛烈な勢いで天地を駆け回る例は、道教經典には無いのではなからうか。

このうち、「茫茫不見」は、目連變文との関係が言われてきた個所だが、『佛本行集經』には、もつと近い例がある。海岸にいた馬王が商人たちを救うため、背に乗せて風のように空を飛んでいく場面だ。

「長恨歌」における道教と佛教

爾時、彼諸羅刹女輩、聞彼馬王哀愍之聲、復聞走聲狀如猛風、忽從睡覺、覓彼商人、悉皆不見。處處觀看、乃遙見彼諸商人輩、乘馬王上、或執諸毛髮鬣支節、乘空而去。既見是已、速將男女、馳走奔赴、至於海岸。(大正三・八八二上)

男たちが逃げ出さないように子供を作っていた羅刹女たちは、馬王が猛風のように走り、空を飛んで去っていく音を聞いて、「忽ち睡りより覺め」、かの商人たちを探し「覓」めたものの、「悉く皆な見えず」。遙か彼方に馬王が商人たちを乗せて去っていくところを發見し、急いで息子や娘たちを連れて海岸に「奔」り至ったというのだ。このうち、「覓…皆不見」は、「長恨歌」の「覓…皆不見」と一致している。というより、状況そのものが似ているのだ。『佛本行集經』では馬王は「猛風」のように「空」を駆けており、「長恨歌」では馬と関係深い「馭」の字が見えている。また、『佛本行集經』では馬王の鳴き聲と駆けていく音を「聞」いて羅刹女たちは「忽ち睡りより覺め」、海岸まで奔っているのに對し、

「長恨歌」における道教と佛教

「長恨歌」では蓬萊宮で仙女となっていた楊貴妃は、天子の使いと「聞道」いて「新たに睡りより覺め、花冠整へず」に急いで堂から下りて來ている。これだけ共通點が多いのは偶然の一致とは思われない。

ここで重要なのは、道教における招魂では、このように稻妻のように空をかけめぐるかという點、そして、招魂であれば死者の魂を地上に招き寄せるはずではないかという點だ。白居易自身、「李夫人」では、「反魂香もて降す 夫人の魂」と詠っている。むろん、道士が魂を天まで飛ばすことはあるものの、その場合、香の煙りと一緒にゆらゆらと上っていくといったイメージではなからうか。また、「長恨歌」では死んだ楊貴妃の魂が玄宗のもとにおもむくことはなく、そればかりか、夢の中にも登場しないとされている。

このように、「長恨歌」の招魂の場面は、道教としては不自然な形となっている。その原因は、死んだ楊貴妃は海上の仙山である蓬萊山にあり、道士が招魂をおこなったという道教風な設定にしておりながら、実際には佛

傳の表現を利用しているためと考えられる。

この推測を裏附けるのは、楊貴妃のいる場所の不自然さだ。「長恨歌」では、天には見當らず、道教風に「海上」の「仙山」にいと明記されているため、東の海上に在るのだろう。ところが、「長恨歌」の後半になると、楊貴妃は「頭を回して、下、人寰の處を望めば、長安を見ずして塵霧を見る」と述べており、長安を下方に望む天上に在ることになっている。海上の仙山は蜃氣樓に基づいて生まれた觀念であるため、東の海に浮かんでいるのであろうけれど、長安を眺めることができほど海上に空高くそびえる仙山など、道教で説かれたことはないか。

おわりに

これまで見てきたように、「長恨歌」に佛傳の影響が見られることは疑いない。さらに問題は、楊貴妃は天にはおらず、東の海上の仙山中の蓬萊宮に在るはずでありながら、後半では、「回頭下望人寰處 不見長安見塵霧

下」と述べられているように、長安を見下ろすことのできる天上にいたこととなってしまっている点だろう。これは、王質夫から聞いた楊貴妃傳説が神仙思想に色づけられたものであったのに對し、白居易が新鮮な表現を求めて佛教の表現を用いたことによって、ずれが生じてしまったものと思われる。今後は、「不見長安」の句が見える『世説新語』夙慧篇の明帝の逸話に加え、「天」に觸れている『法華經』『漢法本内傳』などの影響についても考えていく必要があるだろう。

註

- (1) 白居易と佛教に關する近年の研究成果は、下定雅弘『戦後日本における『白居易と佛教』の研究』を含む『白居易研究年報』第十六號「特集 佛教と文學」(勉誠出版、二〇一五年一月)にまとめられている。老莊思想との關係については、下定『白氏文集を讀む』第四章・第五章(勉誠社、一九九六年)参照。
- (2) 本稿では、古い形を残しているとされる金澤文庫本に基づく下定雅弘『長恨歌―楊貴妃の魅力と魔力』(勉誠出版、二〇一一年)所載のテキストによる。
- (3) 澤崎久和『白居易詩研究』第一部III第三章「白居易と仙遊寺―『長恨歌』成立の舞臺と背景―」(研文出版、二〇一三年)。
- (4) 張振謙「試論道教文化對白居易艷情的影響」(『内蒙古農業大學學報(社會科學版)』二〇〇八年第三期)。
- (5) 徐翠先・石東升「白居易的道教信仰與詩歌創作」(『山西師大學報(社會科學版)』二十九卷第三期、二〇一二年五月)。
- (6) 澤崎、注(3)前掲書。白居易と王質夫の交友については、靜永健「王質夫と白樂天―白居易の整屋縣尉時代―」(『文學研究』第九十三輯、一九九六年三月)も参考になる。
- (7) 陳允吉『佛教與中國文學論稿』「從《歡喜國王緣》變文看《長恨歌》故事的構成―兼述《長恨歌》與佛經文學的關係―」(上海古籍出版股份有限公司、二〇一〇年)。
- (8) 松浦友久『長恨歌』の主題について―『恨』の主題と作者の意圖―(『白居易研究年報』創刊號、二〇〇〇年五月)。
- (9) *Buddhacaria* がどれほど濃艶な描寫に富み、『佛所行讚』がそれをいかに苦勞して曖昧な美文で漢譯しているかは、石井公成「佛傳文學に見えるエロティックな記述な中國人はどう受け止めたか―『佛所行讚』(*Buddhacaria*)』と『長恨歌』―」(小峯和明編『佛傳文學の世

「長恨歌」における道教と佛教

二八

(10) 界』、勉誠社、二〇一六年刊行豫定)
龔賢『佛典與南朝文學』第四章 佛典與南朝詩歌(三、
愆色異相)』(江西人民出版社、二〇〇八年)。

日本道教學會第六十七回大會豫告

- 一、日 時 二〇一六年(平成二十八年)十一月十二日(土)
- 一、會 場 京都大學文學研究科
- 一、行 事 研究發表會・總會・懇親會
- 合同役員會は大會前日の十一日(金)に行う豫定です。

一、連絡先 〒606-8501 京都市左京區吉田本町
京都大學文學研究科 宇佐美文理研究室
TEL 〇七五-七七五三一-二四七一(直通)
e-mail bunrius@bun.kyoto-u.ac.jp

研究發表者公募

左記の要領で、第六十七回大會における研究發表の希望者を公募します。ふるってご応募ください、なお、發表者の決定などにつきましては、本學會理事會に一任させていただきます、七月下旬までにその旨をご通知します。

- 一、發表時間は二十分程度のものであること。
- 二、發表題目及び日本語千二百字以内の發表要旨を添附すること。
- 三、二〇一六年(平成二十八)六月末までに學會事務局宛に文書及びメールで応募すること。